

偶有性について

偶有性：決定論と非決定論の同時存在

→たまたまであっても、タテの分業(階層化)あるいはヨコの分業(専門家化)が成立すること

→たまたま確率の低い状態が成立すること

Open System とは、無秩序→秩序、秩序の生成=片寄り、エントロピーの減少・負低い確率への移行

これに対して、Closed System は秩序→無秩序、エントロピー最大、高い確率

トランプなどで、たまたま確率の低い状態が現出すること

e.g. ポーカーのロイヤル・ストレート・フラッシュ

麻雀の大三元

→ 途中の意図的な手作りはあるが、出現するのはまれ

ただし、そのような組み合わせ(秩序)に一旦はまると、そのような組み合わせが出現する確率は、高くなる

→南方熊楠の「やりあて」、M.アイゲン

大沢真幸(2014)、p.38

偶有性の定義：

1) 必然性と不可能性の両方の否定

2) 必然ではないが、不可能でもない→中間ではない=偶然と必然の同時存在

3) 他でもありうる

→「他でもありうる」のに、さしあたって、「他ではない」のはなぜか。

多義的なのに、当面、一義的なのはなぜか。

システムの根本課題は複雑性の縮減=システムにおいて、要素や要素間の関係が偶有的

→「他でもあり得た」は、複雑性の増大ではないか。

ただし、あいまい→多義性(実現→淘汰)は、あいまいな行為をどうにでも解釈できるという状態から、複数の意味への限定(多義性)と考えるなら、「複雑性の縮減」になる。

この場合、「複雑性」よりも「多義性」の方がより正確